

連続シンポジウム 「分離派建築会誕生 100 年を考える」第 7 回
分離派建築会の展開 ー新しい都市と社会をめざして

第 2 部ディスカッション「新しい生活空間の創造をめざして」

パネリスト：梅宮弘光 佐藤美弥 田所辰之助 岡山理香
モデレーター：杉山真魚／岐阜大学

①「新しい」ということについて：

大正期から昭和初期にかけて、『新社会』『新時代』『新建築』『新住宅』など「新」を冠した雑誌が次々と創刊され、建築の分野では「新興建築」の特集を組んだ記事が多くみられた。分離派建築会の宣言の中では「過去建築圏」と「新建築圏」が対置されている。各論発表で取り上げられる蔵田・川喜田・山口は分離派建築会の活動に途中から参加した面々であり、彼らの「新しい」ものへの認識には創設メンバーと相違もあったのではないかと考えたい。本シンポジウムの副題にある都市と社会というふたつのキーワードとともに考えてみたい。

②分離派建築会の思想・活動と現代の関わりについて：

「新しい生活空間の創造をめざして」というテーマは現代の我々に投げかけたものである。分離派 100 年研究会として、分離派建築会のメンバーの思想形成や創作活動の詳細を調査・整理することに加えて、今日的意義を議論する必要があるだろう。上記①の「新しい」ものは最早古いか、それとも「新しい」価値を持ち続けているのか。また、実現されなかった事柄があるとすれば、それは我々に「新しい」何かを示してくれるのではないだろうか。

補足：「生活空間の創造」という言葉

蔵田がグロピウス著 *Scope of Total Architecture* (1955) の邦訳書につけた表題である (1958 出版)。グロピウスはこの著書の中で都市計画についても述べている。「生活空間」という用語は人間を取り巻く建築空間と都市空間の両方に対して適用可能であり、家具から都市施設までスケールの異なる題材を扱う本シンポジウムに共通の視点を与えるであろう。なお、「生活空間」は 1959 年時点で耳慣れないものであったことを浜口隆一が指摘している (『日本人の生活空間』、新潮社)。1920 年代～30 年代には建築内部の生活空間は「室内」「室内工芸」「室内構成」「生活構成」などの言葉で捉えられることが多かった。